

DSM-5：アメリカ精神医学会の新診断基準をめぐって

オーガナイザー：石原孝二（東京大学・大学院総合文化研究科）

提題者：石原孝二

山崎真也（大阪府立大学・大学院人間社会学研究科）

黒木俊秀（九州大学・大学院人間環境学研究院）

アメリカ精神医学会の新たな診断・統計マニュアル DSM-5 (American Psychiatric Association, *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*, 5th Edition)が2013年5月に刊行される。DSM-5のドラフトはウェブで公開され、様々な議論が展開されてきた。

DSMは1980年の第三版（DSM-III）以降広く受け入れられ、精神障害の捉え方に多大な影響を与えてきた。その影響はアメリカにとどまらず、各国の精神医学・精神科医療に影響を及ぼしただけでなく、他分野や一般の人々の精神障害の理解にまで広く影響を及ぼしている。しかし、DSM-IIIの診断基準は、信頼性（診断の一致率）の実現に関しては成果を上げたものの、その分類体系や診断基準の「妥当性」については問題が残るものとされ、特にDSM-III以降の分類体系がその後の分子生物学的研究などの成果と整合的ではないことが問題視されてきた。DSM-5の改訂作業においてはこの妥当性の問題に関して一定の方向性を示すことが試みられてきている。DSM-5で一挙に生物学的な基盤にもとづいた分類体系や診断基準へと移行することが目指されていたわけではないが、少なくともその足掛かりを得ようとしたのである。DSM-5におけるディメンジョン的アプローチの導入の試みはその一つの現れであろう。しかしDSM-5ではカテゴリー的アプローチの基本的な枠組みが維持されたまま、ディメンジョン的アプローチの導入が図られており、折衷的な印象も与える。そもそも、生物学的な基盤のみにもとづいた、精神障害の診断基準や分類体系を作成することは可能なのだろうか。また、精神障害の診断基準の「妥当性」とは一体何を意味するのだろうか。

本ワークショップでは、ディメンジョン的アプローチや「妥当性」の問題に焦点を当てながら、DSM-5の背景や意義、DSMの今後の改訂の方向性について議論する。また、診断基準としてのDSMが精神医学一般に対してもっている意味についても議論していくことにしたい。